

全国私立大学教職課程協会版「自己点検・評価基準」(板倉キャンパス)

全私教協 2021 年度教職課程運営に関する研究交流集会による

I 教員養成機関の現況及び特徴

1 現況

- (1) 教員養成機関：東洋大学 板倉キャンパス
- (2) 所在地：群馬県邑楽郡板倉町泉野1-1-1
- (3) 学生数及び教員数（令和4年5月1日現在）
 - 学生数 1,861 人
 - 教員数 67 人

2 特色

板倉キャンパスには生命科学部（生命科学科および応用生物科学科）と食環境科学部（食環境科学科および健康栄養学科）が設置されている。これらの学部においては、共に生命科学的基盤の上に立ちながら、「生命」、「環境」、「食」、「栄養」、「健康」といったテーマの下で教育が行われている。またこうした専門性の修得を通じて、学生に実社会での問題を解決する能力や新しい分野を切り拓いていく能力などを身につけさせ、国民の健康的で活力ある生活や社会の発展への貢献ができる人材の育成が展開されている。

こうした教育方針の下で、学校教育分野にも優れた専門性を活かせる人材を輩出するべく、板倉キャンパスには中高理科の一種免許と栄養教諭一種免許の教職課程が設置されている（下記の表を参照）。そして大学院の生命科学研究科には、中高理科の専修免許の課程も置かれている。また教職課程の学びの一環として、他キャンパスと同様に「教職支援室」が設置され、教員採用試験の準備学習や学校ボランティアの斡旋や理科の苦手分野の補習など、教職に向かう進路選択を着実なものにする支援体制も取られている。

2022年度卒業生においては、教員免許（全て中高理科一種）を取得した人数は35名、栄養教諭一種免許状を取得した人数は8名であった。理科一種においては、全員が中学と高校の両方の免許を取得している。また理科専修免許状を取得した人数は2名であった。これらうち、13名が教職をはじめとした教育関係（教職系大学院や文部科学省機関など）に進んでいる。

認定を受けている養成課程（令和4年5月）

学部名	学科・専攻名	教職課程種別
生命科学部	生命科学科	中学校教諭一種（理科）、高等学校教諭一種（理科）
	応用生物科学科	中学校教諭一種（理科）、高等学校教諭一種（理科）
食環境科学部	食環境科学科	中学校教諭一種（理科）、高等学校教諭一種（理科）
	健康栄養学科	栄養教諭一種

II 基準領域ごとの自己点検・評価

〔基準領域 1〕教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

基準項目 1-1 教職課程教育に対する目的・目標の共有

[現状の説明]

板倉キャンパスで教職課程が設置されている生命科学部・食環境科学部を有する。各学部の教職課程教育の目的・目標について、教職員が共通した理解をもてるよう、「卒業認定・学位授与の方針」及び「教育課程編成・実施の方針」等を踏まえて設定するとともに、育成を目指す教師像とともに学生に周知している。

板倉キャンパスの学部・学科の教育に沿ったものとするため、それぞれの学部・学科の教育目標・理念と育成すべき教員像の関連性が明確にする必要があり、その実現に向けて努力・工夫を重ねている。

[長所・特色]

本学では、教職課程教育を通して育もうとする学修成果（ラーニング・アウトカム）が、「卒業認定・学位授与の方針」を踏まえて具体的に示されるよう可視化を図っている。

具体的には、本学教職センターが提示する目的・目標を東洋大学 HP「教員養成に対する理念及び認定課程設置の趣旨等」『履修要覧』に明記している。

板倉キャンパスでは、授与される免許状の種別（学校種別、教科）と学科カリキュラムの目的の関連性が明確となっており、これから求められる育成すべき教員の育成に向けて国や時代がもつめる大局的な視点とともに、各専門性の視点から十分な育成が図られている

[取り組み上の課題]

専門学科の充実と教職課程の充実のバランスをとるとともに果たすことには更なる工夫が必要であると考えられる。

<根拠となる資料・データ等>

資料 1-1-1 東洋大学『教職ガイドブック』：<https://www.toyo.ac.jp/academics/ks/guidebook2019/>

資料 1-1-2 生命科学部『履修要覧 2023』：

<https://www.toyo.ac.jp/-/media/Images/Toyo/academics/faculty/lsc/lsc-policy/2023seimeirisuyoran.ashx?la=ja-JP&hash=0AAD9C894590B01D0B7A74AE1D89B10704AACF55>

資料 1-1-3 食環境科学部『履修要覧 2023』：

https://www.toyo.ac.jp/-/media/Images/Toyo/academics/faculty/fls/23_yoran_shokukan.ashx?la=ja-JP&hash=280D38E56F108C519E7645CF59E90DCABA885577

資料 1-1-4 東洋大学ホームページ「教員養成に対する理念及び認定課程設置の趣旨等」：

https://www.toyo.ac.jp/about/data/education/teacher_training/

基準項目 1-2 教職課程に関する組織的工夫

[現状の説明]

全学組織として教職課程教育を担う全学組織として教職センターを設置し、その運営の中核を担う教職センター運営委員会は教職課程を有する全学科の教員をメンバーとしている。板倉キャンパスからも運営委員会、専門委員会の中心メンバーとして選出され、定期的に行われる会議に出席し、諸課題に対する継続的な検討を行っている。また必要に応じて臨時会議も実施している。さらに、Web 上の情報共有システム（東洋大学 GAROON）を活用し、より日常的で迅速な情報共有と検討の機会を提供している。

[長所・特色]

上記の活動の一環として、全学的には教職センターが中心となって、大学全体の質保証プロセスと連絡させながら教職課程の自己点検・評価を実施している。その成果をもとに、全学組織（教職課程センター）と学部・学科の教職課程との連携を図り、教職課程の在り方の見直と改善を図っている。また、以上の取り組みを含め、教職課程に関連する基本的事項を大学 HP 及び『教職センター紀要』に掲載し、学部、学会の会議で説明などを加え、公開性・透明性を確保している。

板倉キャンパスでは、教職課程が設置されている各学部、各学科の代表、教職関係事務職員との連携を密に取りながら、必要事項の協議、情報の共有などに努めている。

全学的取り組みの一環として、ICT 活用力・指導力の育成を図るため教室及び機器・備品の整備を進めるとともに必要な教科書、ソフトウェアの整備を進めている。また、教職課程教育に関連する図書・資料の収集・公開を行っている。

学生による授業評価アンケートを実施し、学生の視線から授業のあり方を検討する機会を確保している。

[取り組み上の課題]

教職課程教育を担う教員の配置については、課程認定基準に合致したものとなっていることは言うまでもないが、「実務家教員」として配置されている教員はなく、学校教育の実態を踏まえた教職課程教育を実現することは今後の課題である。

教職課程の自己点検・評価を実施しているが、それらが各教員の教育活動や通常常務と十分な関連性を持って行われたとは言えない側面は否定できない。

[長所・特色]に記した取り組みのうち、ICT 活用力・指導力の育成を図る教室の整備などはさらなる充実を図る必要がある。

また学生による授業評価アンケートの結果を授業の改善に活かす方途についても、より具体的・効果的な検討が求められる。

<根拠となる資料・データ等>

資料 1-2-1 東洋大学ホームページ「教職センターについて」：

<https://www.toyo.ac.jp/academics/ks/aboutecc/>

資料 1-2-2 東洋大学教職センター運営委員会議事録

資料 1-2-3 東洋大学教職センター専門委員会議事録

資料 1-2-4 東洋大学学術情報リポジトリ「東洋大学教職センター紀要」：

https://toyo.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=1420&pn=1&count=20&order=17&lang=japanese&page_id=13&block_id=17

資料 1-2-5 東洋大学 HP 授業評価アンケート：

<https://www.toyo.ac.jp/academics/improve/organisation/fd/survey/>

〔基準領域 2〕学生の確保・育成・キャリア支援

基準項目 2-1 教職を担うべき適切な人材（学生）の確保・育成

[現状の説明]

全学的な取組として、教職課程を履修しようとする学生に向けてガイダンスを実施し、本学の教員養成の目標や教職課程の履修、教師に求められる心構え等の説明を実施している。その内容は教職センターが作成し本学HPに掲載されている『教職ガイドブック』にも掲載し、学生が自由に閲覧できるようにしている。

板倉キャンパスにおいても教職課程の履修開始と継続のために求められる能力や心構えに関する学生の理解を深めるため、教職課程教育のポートフォリオである「教職パスポート」の作成を課している。

また『履修要覧』に教育実習に参加する条件を明確に説明するとともに、教育実習ガイダンス時に修得単位数についての注意を促すなど、教員免許状取得に至るプロセスの確認ができるよう配慮している。

[長所・特色]

上記の「教職パスポート」には、教職関連の説明会の記録、「教科及び教科の指導法に関する科目」の学修に関する省察記録、介護等体験の記録など、教職課程教育で自ら学び修得した事項を記載するとともに、「自己評価」のページを設けて「学校教育についての理解」や「子どもについての理解」を自己評価して記載し省察する素材としている。「教職パスポート」は教職実践演習の授業で活用し、学生が自身で省察するとともに、教員とともに学修成果と課題を確認するための資料としている。

[取り組み上の課題]

教育実習に参加するための要件については適宜見直しを行っており、ガイダンスなどを通じて学生にも周知しているが、各学生の状況について定期的に把握し、必要に応じて面接や指導を行う体制は十分とは言えない。

教員をめざす学生にさまざまな支援を実施しているが、教職支援室の利用が必ずしも十分ではないなど、支援体制に関する情報の提供と活用を促す取り組みを強化することは今後の課題である。

<根拠となる資料・データ等>

資料 2-1-1 東洋大学『教職ガイドブック』：<https://www.toyo.ac.jp/academics/ks/guidebook2019/>

資料 2-1-2 東洋大学『教職パスポート』

資料 2-1-3 生命科学部『履修要覧 2023』：

<https://www.toyo.ac.jp/-/media/Images/Toyo/academics/faculty/lsc/lsc-policy/2023seimeirisyuyoran.ashx?la=ja-JP&hash=0AAD9C894590B01D0B7A74AE1D89B10704AACF55>

資料 2-1-4 食環境科学部『履修要覧 2023』：

https://www.toyo.ac.jp/-/media/Images/Toyo/academics/faculty/fls/23_yoran_shokukan.ashx?la=ja-JP&hash=280D38E56F108C519E7645CF59E90DCABA885577

基準項目 2-2 教職へのキャリア支援

[現状の説明]

キャリア支援体制として、教職授業科目担当の教員、教職事務担当の事務職員、教員採用試験対策等を担う「教職支援室」の3点を柱とした体制を構築し、学生の指導・支援にあたっている。

教員は担当授業の中で、折に触れて教職に関する最新動向の紹介や解説を行い、あるいは学校教員をゲスト

トスピーカーとして招くことで、教職に関するリアルな情報提供と意欲の喚起に務めている。事務職員は入学時から始まるさまざまなガイダンスや説明会にて、制度理解や必要な諸手続きに関する具体的な支援を行っている。教職支援室には学校教育の実務経験（管理職経験も含む）豊富な専門スタッフを置き、多種多様な学校支援活動の斡旋や教員採用試験受験に向けたきめ細かい指導や、試験合格者による講演会の実施などに取り組んでいる。これらの活動を恒常的・日常的に行うことによって、学生への継続的な支援につなげている。

学生の意欲や学びの状況を理解するため、学生には『教職パスポート』を作成させて教職への想いや学習の進捗を綴らせている。また教職支援室の利用状況や指導内容等を細かく記録し、教職に携わる教職員間で情報共有している。

[長所・特色]

キャリア支援は、全学的な取組や他キャンパス等での取組との連携も重視しながら行われている。

大学では教職専門のアプリが稼働しており、また本学教職センターの『教職センター紀要』や『パイディア』といった定期刊行物も発行されている。それらにおいて教育実習参加状況等の統計数値や教員採用試験合格体験記等が掲載され、学生や教職員への参考資料として提供されている。

また、他キャンパスで開催される教員採用試験対策講座や、理科実験に関するワークショップなどへの参加を積極的に促している。これらを通じて、教師としての力量形成を図るだけでなく、志を同じくする学生との幅広い交流から学生の教職への意欲や志望の明確化を図っている。あるいは、「白山教育会」（本学卒業生教員の会）のイベントなどへも希望学生を派遣し、本学を軸とした縦のつながりや交流をもって教職への夢への一助としている。

さらに、埼玉大学教職大学院と協定を結んで学生を送るなど、教職関係の進学先大学院の開拓も行われている。

[取り組み上の課題]

教職課程に携わる教員や事務職員間だけでなく、学部・学科の専門科目の教員等との教職教育に関する共通意識や理解の強化、また教員採用試験対策の要となる教職支援室の一層の利用などが課題として挙げられる。

<根拠となる資料・データ等>

資料 2-2-1 東洋大学ホームページ「教職支援室について」：<https://www.toyo.ac.jp/academics/ks/about/>

資料 2-2-2 東洋大学『教職パスポート』

資料 2-2-3 東洋大学学術情報リポジトリ「東洋大学教職センター紀要」：

https://toyo.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=1420&pn=1&count=20&order=17&lang=japanese&page_id=13&block_id=17

資料 2-2-4 『パイディア（東洋大学教職課程年報） 2023』

資料 2-2-5 東洋大学教職センター専門委員会議事録

[基準領域 3] 適切な教職課程カリキュラム

基準項目 3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

[現状の説明]

教職課程に関する法令（教育職員免許法、同施行規則、課程認定基準など）を遵守し、また教職課程に関する最新の制度に適合したカリキュラム編成およびその実施を行なっている。各授業科目のシラバスもそれに盛り込まれた要請を反映したものとなっている。

[長所・特色]

1～3年次の3年間で卒業単位のほとんどを取得させるという理系キャンパスのカリキュラムにあって、教職課程もその中にしっかりと根付かせて運営している。例えば、大学によっては教職課程科目を土曜日に固めるようなところもあるが、本キャンパスは教職課程をそのような“オプション”扱いにするのではなく、キャンパスのカリキュラムの中で学部・学科の専門科目のカリキュラムと整合性を保ちながら実施をしている。

[取り組み上の課題]

国が定める法令や施策等に基づいてカリキュラムが運営されるのは必須であるが、本キャンパスの教育の個性や特徴なども追加した特色あるカリキュラム運営が期待される。そのためには、教職課程が複数学科にまたがって運営されることから、学部・学科のカリキュラム全体を見渡したカリキュラム・マネジメントの視点が、より一層求められる。

<根拠となる資料・データ等>

資料 3-1-1 東洋大学シラバス：<https://g-sys.toyo.ac.jp/syllabus/>

資料 3-1-2 東洋大学入試情報サイト「生命科学部 教育課程表・カリキュラムマップ」：
<https://www.toyo.ac.jp/nyushi/undergraduate/lsc/curriculum/>

資料 3-1-3 東洋大学入試情報サイト「食環境科学部 教育課程表・カリキュラムマップ」：
<https://www.toyo.ac.jp/nyushi/undergraduate/fls/curriculum/>

資料 3-1-4 生命科学部『履修要覧 2023』：
<https://www.toyo.ac.jp/-/media/Images/Toyo/academics/faculty/lsc/lsc-policy/2023seimeirisuyoran.ashx?la=ja-JP&hash=0AAD9C894590B01D0B7A74AE1D89B10704AACF55>

資料 3-1-5 食環境科学部『履修要覧 2023』：
https://www.toyo.ac.jp/-/media/Images/Toyo/academics/faculty/fls/23_yoran_shokukan.ashx?la=ja-JP&hash=280D38E56F108C519E7645CF59E90DCABA885577

基準項目 3-2 実践的指導力養成と地域との連携

[現状の説明]

実践的指導力の認知的能力の面における教育については、各授業科目において、新学習指導要領の考え方や指導のあり方に沿った授業が展開されるよう配慮され、そのために教員によるシラバスの相互確認などが行われている。

学生の非認知的な能力の伸長については、カリキュラムに含まれている「介護等の体験」や「教育実習」等のもとより、学校現場でのボランティアやインターンシップ、あるいは埼玉県教育委員会の「かがやき教師塾」のような教育委員会主催の教員養成講座への参加など、カリキュラムに含まれていない地域との連携も踏まえながら行われている。これらの活動を通じて、参加した学生は児童生徒理解やコミュニケーション力などについて学び、また地域の教育の特色や学校社会における教師としての行為態様なども身につけるようになってきている。これらの実践的な機会の斡旋や学習支援は、教職支援室が中心となって行なっている。

[長所・特色]

学校ボランティアや学校インターンシップなどは公募の形で募集があるが、それ以外にも本キャンパスでは教職員の個人的なつながり（教員時代の知り合いや、授業のゲストスピーカーで来校していただいたなどの新規の知己など）も積極的に活用している。こうした個人的なつながりがベースにあることによって、大学側と受け入れ側との風通しがよく、連携もより密接になり、その結果、学生への指導や支援の行き届いた質の高い学びが実現されている。

その他、本キャンパスの専門学部でも各種研究機関や地元企業などでのインターンシップへの取組がある。夏休み等を利用したもので、単位認定もあり、その成果について発表会も開くことで学びや体験の振り返りと定着も行われている。学生はこうした機会も利用しながら、科学／理科分野における自己の専門性を実践的に高められるようになってきている。

[取り組み上の課題]

学校ボランティアや学校インターンシップなどに魅力を感じる学生は少なくないが、本キャンパスの立地条件（交通の便の悪さ）や実験・実習の多さなどから、実際に参加する学生の数は多くない。学生が参加しやすい環境整備や施策が求められる。

<根拠となる資料・データ等>

資料 3-2-1 東洋大学『教職ガイドブック』：<https://www.toyo.ac.jp/academics/ks/guidebook2019/>

資料 3-2-2 東洋大学教職センター専門委員会議事録

資料 3-2-3 東洋大学ホームページ「教職支援 NEWS」『「総合的な学習（探究）の時間」の最終報告会を開催しました』：https://www.toyo.ac.jp/news/academics/faculty/fls/202207019_kyousyoku/

資料 3-2-4 東洋大学ホームページ「生命科学部の特色ある取り組み」：

<https://www.toyo.ac.jp/academics/faculty/lsc/program/>

資料 3-2-5 東洋大学ホームページ「食環境科学部の特色ある取り組み」：

<https://www.toyo.ac.jp/academics/faculty/fls/program/>